―資料―

唐招提寺蔵釈迦念仏会の資料について（付、資料翻刻）

藤田　依里

1.

唐招提寺の釈迦念仏会は、唐招提寺の復興を目的として、貞慶により創始された法会である。『招提千歳伝記』[1]によると、貞慶は、建仁二年（一二〇二）八月に、釈迦念仏会の道場とするため、礼堂を修理し、釈迦念仏会を試みた。翌建仁三年（一二〇三）九月十九日から二十六日にかけて初めて釈迦念仏会を行い、以降永式とした。釈迦念仏会には、興福寺など諸寺諸山も出仕し、順番を定め不断念仏を修した。

また、中興第一世長老となった覚盛は、寛元二年（一二四四）三月十八日から二十五日の八日間釈迦念仏会を行った。以来、唐招提寺では三月と九月に釈迦念仏会を行っており、特に九月の釈迦念仏会は「秋念仏」とも呼ばれていた。現在、三月に行われていた釈迦念仏会は断絶してしまったが、九月の釈迦念仏会は現在も行われている。

釈迦念仏会は唐招提寺で最も重要な法会である。しかし、これまで本格的な研究は行われていない。硲慈弘氏[2]および二宮守人氏[3]は鎌倉時代に流行した釈迦念仏の一例として、唐招提寺の釈迦念仏会を取り上げ、成田貞寛氏[4]は『釈迦念仏会願文』から創始者である貞慶の信仰を考察し、高木豊氏[5]は覚盛以降の釈迦念仏会に言及し、細川涼一氏[6]は本尊である礼堂安置釈迦如来立像の胎内文書についての考察をされている。他に『奈良六大寺大観』[7]に資料とともに釈迦念仏会の内容に関する記述がある。このように、これまでの研究は、『願文』や胎内文書を中心とした研究であり、釈迦念仏会の次第の具体的な内容の研究は行われていない。それには、釈迦念仏会の資料が公開されたことがないというのが最大の理由であろう。

このたび、唐招提寺蔵の釈迦念仏会の次第に関する資料を調査する機会を得た。

①室町時代に祐雅が作成した資料。
②江戸時代に第六十四世長老実海が作成した資料。
③江戸時代に第六十七世長老恵光が作成した資料（直筆一冊・写本二冊）。

そこで、唐招提寺に所蔵されている釈迦念仏会の資料の中で、最も古い①「祐雅作成資料」について翻刻紹介をしたい。

2.

祐雅により作成された唐招提寺釈迦念仏会の次第十八帖が現存している。十八帖は、すべて桝形粘葉装で、縦十六糎、横十六糎。楮紙の無界の料紙に、本文が漢文体で記され、返り点・送り仮名が付されて

いる。染みや虫食いによる破損も見られるが、本文の判読に影響は見ない。個々の資料の書誌については以下に記したい。

①秋念仏表白

表表紙中央に外題『秋念仏表白』（朱点あり）、右下に「祐雅」と墨書され、外題下に「戒学院印」の朱印（以下朱印）、外題右側に「律宗戒学院図書」の蔵書票（以下蔵書票）が貼付されている。本文は十二丁、表表紙見返しから法会の次第が書き始められている。句切点・連符は墨書、首点は朱。

十二丁裏に朱印、末尾には奥書がある（資料1参照）。奥書には、

時永正十八年辛巳九月十九日
唱導勤仕之　祐雅俗才七十四

とあり、祐雅が永正十八年（一五二一）に釈迦念仏会の導師を勤める際に書いたものであることが分かる。

八丁表の本文中に、二種の年数が書かれている（資料2参照）。まず、本文では、

始メ王ショリ此ノ会ヲ以来至マテ当年三百十八年

とあるが、年数の「十八」の右傍に「廿ヶ」と書き加えられている。「三百十八年」は、祐雅が、『秋念仏会表白』を作成した永正十八年（一五二一）に当たる。「三百廿ヶ年」は、大永三年（一五二三）である。おそらくは、大永三年の釈迦念仏会に、祐雅作成の『秋念仏会表白』を使用した際に書き込まれたものであろう。

②舎利別徳

表表紙中央に外題『舎利別徳』、左下に「祐雅」と墨書される。本文は表表紙見返しと一丁（裏表紙を含む）。句切点・連符は墨書。

③舎利別徳

表表紙左上に外題『舎利別徳』、左下に「祐雅」、右上に小字で「三」と墨書され、右下に朱印、蔵書票が中央に貼付されている。本文は三丁（裏表紙を含む）。本文末尾に朱印、句切点・連符は墨書。本文には二丁裏と三丁表の二箇所に付箋がある（資料3参照）。

二丁裏には付箋が貼られ、本文に、

我カ寺ノ星霜将ニ八百年ニナン〳〵トス

とあるが、「八」の字の右下に小字で「九」という書き込みがあり、さらに、「八百年ニナン」という箇所に付箋が貼られている。付箋には、「九百年及」と書かれている。

また、三丁裏には別筆による付箋が二枚貼られている。年代順に抜粋すると、本文は、

此ノ会ノ御願建仁／三年ヨリ至ルマテ当年三百廿一ヶ年

であるが、「当年三百廿一ヶ年」という箇所に付箋が二枚貼られている。一枚目の付箋には、「当年四百三十九年／正保三年迄」と書かれ、二枚目の付箋には、「明暦三丁酉四百四十五年／万治元年□□□六」と書かれている。

本文の「廿」の下の文字は墨で塗りつぶされている。しかし、その下の文字がかろうじて「八」と判読できる。さらに、「廿」という字も「十」という字に書き加えて「廿」としているようだ。つまり、当初は「三百十八年」と書かれていたのである。また、墨で塗りつぶした「八」の右傍に「一ヶ」と書かれている。①の『秋念仏会表白』と同様に、「三百十八年」とは永正十八年である。そして、書き加えられた「三百廿一ヶ年」は大永四年（一五二四）である。

以下同様に、一枚目の付箋の「四百三十九年」は寛永十九年（一六四二）と正保三年（一六四六）である。

二枚目の付箋には、二種類の年号・年数が書かれているが、年号と年数が合致しない。まず、一種類目は明暦三年（一六五七年）である。

しかし、「四百四十五年」は慶安元年（一六四八）である。そこで、明暦三年から建仁三年を引くと、その差は四百五十四である。つまり、正しくは「四百五十四」であり、付箋にある「四百四十五」は誤りである。同様に、万治元年とは、一六五八年であり、明暦三年の翌年である。そこで、「四百四十五」という間違った年数に一年を加え、「六」と訂したのであろう。

本文の書き換えと二枚の付箋は、祐雅作成資料『舎利別徳』を実際に釈迦念仏会で使用した時の年号である。

④御舎利惣別二徳

表表紙中央に外題『御舎利惣別二徳』（朱点あり）、左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は四丁である。句切点・連符は墨書。

⑤御舎利別徳

表表紙中央に外題『御舎利別徳』（朱点あり）、右上に小字で「廿一日」、左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題右側に蔵書票が貼付されている。本文は四丁。二丁裏と四丁裏は白丁。句切点・連符は墨書。一丁表に内題「舎利惣別二徳」、左下に「祐雅」と墨書されている。

三丁表には無記入の付箋（資料4参照）が二箇所に貼られている。本文には、

御舎利惣徳者三身如レ常
別ノ御功徳者宝恙タラニ経ニ曰ク

とあるが、「御舎利」と「別ノ功徳者」の箇所に付箋が貼られている。

⑥舎利惣別二徳

表表紙中央に外題『舎利惣別二徳』、左下に「祐雅」と墨書され、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は二丁。句切点は墨書。

⑦三身尺并舎利別徳

表表紙中央に外題『三身尺并舎利別徳』、右上に小字で「十九日」、左下に「祐雅」と墨書され、右下に朱印、外題左側に蔵書票が貼付されている。本文は二丁と裏表紙見返し。句切点・連符は墨書。

⑧三身并舎利別徳

表表紙中央に外題『三身并舎利別徳』（朱点あり）、左上に小字で「二」、左下に「祐雅」と墨書され、右下に朱印、外題左側に蔵書票が貼付されている。本文は二丁。句切点・連符は墨書、首点は朱。

⑨三身并舎利別徳

表表紙中央に外題『三身并舎利別徳』（朱点あり）、左下に「祐雅」と墨書。右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は四丁と裏表紙見返し。句切点・連符・声点は墨書。

⑩廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』、左上に小字で「初日」、左下に「祐雅」と墨書され、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は三丁（裏表紙を含む）。連符・声点は墨書、首点は朱。

一丁裏に付箋（資料5参照）が二箇所貼られている。本文は、

春日五所之和光洞達
慈悲万行之威徳経釈

であるが、「洞達（トウタツ）」と「経釈」の箇所に付箋が貼られている。「洞達」の付箋は「遠（トヲクカ、ヤキ）耀」であり、「経釈」の付箋は「弥（ヨ）増（サン）」である。

⑪廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』（朱点あり）、外題右上に小字で「第二日」（朱の合点あり）、左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は二丁と裏表紙見返し。句切点・

連符は墨書、首点は朱。

⑫廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』、左上に小字で「第三日」、左下に「祐雅」、右上に「一」と墨書、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は四丁と裏表紙見返し。句切点・連符・合点は墨書、首点は朱。

⑬廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』（朱点あり）、左上に小字で「第四日」、左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は三丁（裏表紙を含む）。句切点・連符は墨書、首点は朱。三丁裏の柱に、「二」が墨書。

⑭廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』（朱点あり）、左上に小字で「第五日」、左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は三丁（裏表紙を含む）。句切点・連符は墨書、首点は朱。三丁裏の柱に「三」と墨書。

⑮廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』（朱点あり）、外題右上に小字で「第六日」と墨書。「六」は、元は「七」で、その上から「六」と訂正し、さらに右傍に「六」とある。左上には小字で「廿四日」、左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は三丁（裏表紙を含む）。句切点・連符は墨書、首点は朱。

⑯廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』（朱点あり）、左上に小字で「第七日」と墨書。「七」は、「八」の上から「七」と訂正し、さらに右傍に「七」とある。左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題左側に蔵書票が貼付されている。本文は三丁と裏表紙見返し。句切点・連符・声点は墨書、首点は朱。

⑰廻向秋念仏

表表紙中央に外題『廻向秋念仏』、左上に「第八日」、左下に「祐雅」と墨書、右下に朱印、外題下に蔵書票が貼付されている。本文は一丁と裏表紙見返し。

一丁表には付箋が貼られている（資料6参照）。本文は、

天衆地類　倍増法楽
春日五所　倍増威光

とあるが、付箋には、

春日五所　倍増法楽
輪蓋龍王　倍増威光

とある。

⑱弥陀如来惣別三身事

表表紙左側に外題『弥陀如来惣別三身事』、右上に小字で「七帖内」、右下に「祐雅」、その右側に「正海」と墨書、左側に朱印、外題右側に蔵書票が貼付されている。本文は六丁と表・裏両表紙見返し。句切点・合点は墨書。紙の変色、虫食いによる破損が十八帖の中で最も多い。裏表紙の柱に墨書の文章があるが判読できない。

3.

祐雅作成の十八帖の資料は、一具として紙に包まれた状態で保存されていた（資料7参照）。この包紙の表には、右下に「律宗戒学院図書」の蔵書票が貼付され、右上には「参百弐拾四」と書かれた書籍番号票が別の書籍番号票の上に重ねて貼られている。また、「保存」という朱印が蔵書票の上に捺されている。さらに、唐招提寺第八十四世

長老北川智棄師による書入れがある。

永正十八年祐雅直筆
秋念仏会表白
法則等　　十六帖

この書入れによると、帖数に「十六帖」と「十八帖」という差異がある。十八帖の内、蔵書票が貼られていないのが②『舎利別徳』だけである。他にはすべて「律宗戒学院図書」の蔵書票が貼られ、さらに、「戒学院印」という朱印が捺されている。しかし、十八帖の中には、同一外題を付した資料がある。それは、②③の『舎利別徳』と⑧⑨『三身并舎利別徳』である。これら同一外題の資料をそれぞれ一種類と認定し、「十六帖」としたと思われる。さらにこの包み紙は、表に「奉納戒学院末代保存禁散失、棄」、裏に「秋念仏会用表白十六帖」と朱で書かれた紙帯で括られている。また、前述の書き入れに続いて、

棄云享保六年慧光勤導之師
従前々之法則数通散在故一所聚之
法則以前共此ノ法ヲ所用アリ参考
要本也永久保存要
永正十八年不大正十三年■■■四百九年也
祐雅ハ第五十五世長老源祐和尚弟子
ナラン者追テ取調所記スベシ

という表書がある。この智棄師による表書から、十八帖の「祐雅作成資料」は、江戸時代に第六十七世長老慧光が「釈迦念仏会」の次第書を整理した際に参考とした資料であることが分かる。

「祐雅作成資料」から明らかになった点は、まず、①の資料の奥書で分かるように、祐雅が釈迦念仏会の導師を勤める際に作成したものである。本来唐招提寺の釈迦念仏会の導師は長老が勤めるのが通例である。ところが祐雅は長老にはなっていない。長老でない祐雅が導師を勤めるに至った経緯は分からないが、『招提千歳伝記』[8]に

律師祐雅、住二持招提法華院一。以レ律導レ人。（以下略）

と名を連ね、さらに、十八帖にも及ぶ法則を作成している点からも、釈迦念仏会の導師を勤めるに足る才能・実力を有した人物であったことは確かであろう。

次に、十八帖の法則の性格は、①③の法則から推測できる。前記したように本文の年数箇所に①には書き込みが、③には付箋が貼られ、具体的な年号・年数が記載されていた。こういった書き込みや付箋は、釈迦念仏会の導師を勤める人物が加えたものである。言い換えれば、書き込みや付箋にかかれた年号・年数は、「祐雅作成資料」が実際の法会で使用された時の年号・年数である。

「祐雅作成資料」の「釈迦念仏会」の次第は、以下の通りである。①の法則表表紙見返しから、「登礼盤・一礼・着座・三礼起居・神分」、外題から「表白」、十二丁裏の本文「願文読畢テ」という表現から「願文」。②～⑨の法則から「三身・舎利釈」。⑩⑪⑯⑰の法則から「廻向・補欠分」。①の法則三丁表には「般若心経　打／大般若経　打」とある。「打」とは法要の作法を表し、「磬」を打つという意味である。また、⑩⑪の法則にも作法に関する記述がある。⑪の法則裏表紙見返しに、「補欠分　釈迦牟尼宝号丁／供養浄真言丁　廻向無上大菩提丁」とある。「丁」とは①の「打」と同一の意味を持ち、磬を鳴らせという指示である。①と⑩～⑯の法則には、上声で読むという指示である「上」が朱で書かれている。⑬の法則では、「上」を墨書の上から朱でなぞっている。⑩～⑰の法則の表表紙には、「初日」・「第八日」といった、法会の日数を示した記述があり、「祐雅作成資料」の「釈迦念仏会」が八日間の法会であることが分かる。

祐雅作成資料は、実際に法会で使用されていたという点が重要であり、これまで不明であった中世の釈迦念仏会の姿を明らかにする上で有益な資料である。

注

（1）関口静雄・山本博也編著『唐招提寺・律宗戒学院叢書　第一輯　招提千歳伝記』（平成十六・二）

（2）硲慈弘「鎌倉時代に於ける釋迦念佛勃興」（『日本仏教史學』創刊号、昭和十六・八所載）のち、『日本佛教の開展とその基調（上）』名著普及会（昭和六十三・三）収録

（3）二宮守人「釋迦念佛考」（『浄土学』22・23号、昭和二十五・十一）

（4）成田貞寛「鎌倉期南都諸師の釋迦如來観と利生事業」（『佛教大學研究紀要』44・45合巻号、昭和三十八）

（5）高木豊「釈迦念仏小考」（桜井徳太郎編『日本宗教の正統と異端』弘文堂、昭和六十三・十）

（6）細川涼一「唐招提寺釈迦如来像胎内文書と女性・虫・非人」（『歴史評論』438号、平成二）

細川涼一「釈迦―唐招提寺の釈迦念仏」（『國文學解釈と教材の研究』44巻8号、平成十一・七）

（7）『奈良六大寺大観第13巻　唐招提寺』補訂版、岩波書店、平十三・一―平成十四・九

（8）註（1）前掲書参照

《凡例》

一、翻刻にあたって、その底本を、唐招提寺・律宗戒学院所蔵の祐雅直筆の十八帖本に採った。

一、漢字は出来るかぎり底本の文字遣いを反映するように努め、旧字体・異体字はそのまま使用した。ただし、異体変体仮名は通行字体に改めた。

一、行取・誤字・脱字等もそのままに翻刻した。

一、返り点の誤脱も訂正せず、底本の通りに翻刻した。

一、首点・合点・連符は省略した。

一、底本の句切点は「、」で記した。

一、付箋に関しては当該位置を〔　〕で括り、順に本文左側に列記した。

一、虫損により判読できない箇所は「虫」と記した。また、それ以外で判読できなかった箇所は「■」で記した。

一、誤字は、当該文字に二重線を付し、底本の指示通り、右傍に訂正文字を記した。また、脱字を示す「○」も底本通りに記し、「○」の右側に訂正文字を記した。

《翻刻》

唐招提寺蔵祐雅作成資料（十八帖）

①秋念佛表百

秋念佛表白　」①表表紙外題

先登礼盤　一礼

次着座

次三礼起居

次神分等

稱名念佛之庭舍利

讃嘆之砌リ飡ニ受シ法味ヲ

證明ンカ善願ヲ爲メニ冥衆定テ

降臨影向シ給ラン　然則

奉リテ始メ梵天帝釈、護世四

王ヲ三界所有ノ天王天衆、日月

護星諸宿曜等、閻羅王界

閻魔法王、五道大臣、泰

山府君、司命司禄、冥官　」①1丁オ

冥衆等、日本國主、天照

大神、王城鎮守、正八幡

三所、法相擁護、春日權

現、山内諸神、御部類眷

属、殊ニハ當所勸請諸大

明神、別而列座ノ諸衆等、　」①2丁オ

當年属星、本命元神、

本命曜宿、當年行厄、

流行神等、惣シテハ日本國中、

大小神祇、各々ノ爲ニ法樂

莊嚴威光倍増一一切神　」①2丁ウ

分ニ般若心經　打

大般若經名　打

次表白

慎敬白法報應化三

身如來、一代教主、尺迦

牟尼無上、大覺世尊、證　」①3丁オ

明法花、多宝世尊、十方分

身諸尺迦文、佛、妙法蓮

花、真淨法門、八万十二、

權實聖教、普賢文

殊、觀音旃勒等ノ三賢十　」①3丁ウ

地、菩提サタ、身子目連、迦

葉迦旃延等ノ、四向四果賢

聖僧宝、霊山虚空、二處

三會、三反土點、諸來集　」①4丁オ

者惣シテハ盡空法界、不可説
々々々ノ三寶ノ境界毎ニ而言ク
方ニ今マ南瞻部州、大日本
國、大和州、唐招提寺之
道場ニシテ本寺ノ學侶、尸羅ノ
五衆、四部群集シテ一心ニ合セレ掌ヲ
點シテ二八晝夜之漏尅ヲ一唱ヘ
牟尼尊之宝号ヲ一日々ニ
講ニ讃シ一乘究竟之妙典ヲ一
座々ニ廻ニ向シ七分全得之勝
業ヲ一御事有リ
御願旨趣如何者　夫レ
上無始無終ノ之眠リ
尺尊不ニ玉ハスン一出世シ者ハ待タン二何ノ暁ヲカ一
三身四徳之覺リ
妙法ニ不スンレ得ヘ一値フコトヲ者ハ期セン二何レノ時ヲカ一
諸佛一大事ノ之因縁
只有リ二此ノ經ニ焉
衆生三菩提之直道
偏ヘニ顯ルニ今ノ典ニ矣
無量無數劫　聞是法亦難
能聽是法者　此人亦復難
難シテレ値ヒ兮遇フ　宿習可シレ喜フ
如來滅度　若有人聞
妙法花經　我亦与授
難シテレ聞キカ兮聽ク　當成無シレ疑ヒ

」①4丁ウ

」①5丁オ

」①5丁ウ

」①6丁オ

」①6丁ウ

非ニ其ノ機ニ一者ハ　不スレ得ヘ二信受ルコトヲ一
五千ノ退席悲カナ矣　夫レ
無キ其ノ縁一者ノハ不スレ能ハ二見聞ルコト一
舍衛ノ三億何ナル人ト哉ソヤ
今マ既ニ載戴ク二如來之遺骨ヲ一
希ナリ二龜木之値ヨリモ一
恣ニ是レ鮮ス二如法ノ之真文ヲ一
似リ二曇花之開クルニ一
出纏在リ二我カ心ニ一成佛更ニ不スレ遠ラ
依之
本願上人泰始カタク二メ玉ヨリ此ノ會ヲ一以來タ
至マテ二當年ニ三百十ヤ八年ノ星霜
雖モ二年シ舊タリト一
永不退轉ノ之御願
追テレ日ヲ新タナリ
結縁ノ之諸人成シ二
二處三會之大衆ヲ一
廣大〇之利益及フ二
八方微塵ノ之世界ニ一
地是レ過海大師之蹤跡
天平ノ之月キ不レ易ヘ二昔ノ光ヲ一
會ハ又タ本願上人ノ之善巧
建仁ノ之夕ヘノ風セ尚ヲ殘ス二古ノ聲ヲ一
法席御發願ノ之旨皈
講衆御逆修ノ之意趣
御願文并ニ諷誦ニ被ラレ載セレ之ヲ

」①7丁オ

」①7丁ウ

」①8丁オ

」①8丁ウ

」①9丁オ

惡羊ノ短才、演説併ラ存レス畧ヲ、
　觀夫レ
上林ニ有リ紅葉一有リ黄葉、
　自ラ暗ハス二得益之浅深ヲ一
庭ニ紫蘭碎テ露菊ノ殘ル
　省ミレニ分カト結縁之遅速ヲ一
景色ノ自然感應必然タリ
　若然者
三千ノ學侶　參勤ノ五衆
上現ニハ象テ二神明佛陀之擁護ヲ一
　保チ二万歳之嘉運ヲ一
當ニハ依テ二七分全得之功業ニ一
　圓ニシ二三身之大果ヲ一
殊ハ伽藍安全　興隆正法
　法莚不退　利益無邊
　乃至
一乘ノ唱ノ下ニ舍ステメヤ二諸ノ闡提断善ヲ一
皆成ノ言ノ内ニ不レラン漏サ定性無性ヲ一
　假令タトヒ
衣キレ毛ヲ戴クレ角ヲ之禽獣モ
　免レ二弓矢ノ之怖ヲ一
潜クレ波ヲ泳ヨレ水ヲ魚龜モ
　遁レン二釣網之憂ヲ一
　惣シテハ
梵風拂ヒ二有頂ノ之雲ヲ一
法雨消ザン二無間ノ之焔ヲ一　敬白

」①9丁ウ

」①10丁オ

」①10丁ウ

」①11丁オ

」①11丁ウ

委シキ旨子ハ被レル載セ二御願文ニ一捧ケ二讀テ之ヲ
佛前ニ可シ顯ス二善願之旨趣ヲ一
願文讀畢テ
御願文如シ此ノ本尊知見證明給ヘ
　戒學院印
　旨永正十八年辛巳九月十九日
　唱導勤仕之　祐雅俗才七十四

」①12丁オ

」①12丁ウ

」①裏表紙見返し

」①裏表紙

②舍利別德

舍利別德
舍利別ノ御功德者
物ニ躰相アリ佛ケ在世ノ卅二相ハ々ナリ
相ハ用也佛ノ十力四無畏念
經等ノ德相ハ皆是躰ノ上ノ德相ナリ
又躰ニハ用アリ用ハ躰ノ用ナリサレハ

」②表表紙外題

舎利ハ佛ノ躰性、卅二相ハ相ナリ
用ナリサレトモ
躰用ハ不即不難ナレハ万徳
躰用ニ最ス真智何ソ隔テン二黄
金ノ腐ヲ一サレハ獅子國ニ行テ
現身説法玉シ相好光明宛モ
如トク二生身ノ一ナレハ佛舎利、妙法
花共ニ躰用不離ナルヘシ
定知三千ノ駄都忽ニ光明ヲ
放テ諸衆之懇志ヲ照シ
御座サンコト有レ憑、者哉

」②表表紙見返し

」②裏表紙見返し

③舎利別徳

」②裏表紙

舎利別徳

三身畧尺
法身ハ離レ、妄ヲ真理

」③表表紙外題

」③表表紙見返し

報身ハ叶フ理ニ妙智
應身ハ随類應同ノ色質シツ
三身畧尺取要可有之
御舎利別ノ御功徳ハ為ニハ在世機縁一
示シ二生身ヲ一為ニハ滅後我等カ留ム身骨ヲ一
若シ無ハ二砕サイ身之方便一者邊地之
我等苦海依レテカ何ニ濟ラン長夜
期セン二何ノ暁ヲカ一舎衛ノ三億免ステニ
漏ル二在世之化導一ニ粟散邊地
滅後之迷徒、拝ル二遺身ヲ於肉眼一ニ
過分ノ幸也付テ二之一レニ案スルニ本朝ノ之
傳来ヲ我祖傳戒大和尚以前ノ
将来雖レ及ト二数度一ニ其ノ数ス滿二
三千粒一ニ奇瑞盛ナル二天下一ニ者無シ
レ齊ヒトシキ二ハ當寺三千ノ御舎利一ニサレハ
嘉禎年中ノ比春日大明神ノ御
侘宣ニ云ク吾レ日々ニ参二詣シテ三聚浄
戒旡通之精舎一ニ夜々ニ降二臨スト
三千粒御舎利安並之霊場一ニ
示シ玉ヘリ眞流モ既ニ尊重シ玉フ
人倫豈ニ帰依セサランヤ　サレハ
我カ寺ノ星霜将ニ[八百年ニナ九]ン〳〵トス
九百年及
法輪恒転之勤メ于レ今相續モ虹
梁曽テ不レ撓ミダレ此ノ會ノ御願建仁
三年ヨリ至ルマテ[當年三百十八年]

」③1丁オ

」③2丁オ

」③2丁ウ

①當年三百廿一ヶ年
②當年四百卅九年
正保三年迄
③明暦三丁酉四百四十五年
萬治元年□□□□六

稱名之聲韻無二斷絶一スルコト日月
雖レ廻ルト法席不二退転一セ寒暑押シ
移ルト井ヘトモ會場ハ無シ動クコト此レ併ラ
遺身ノ駄都、依二廣大ノ巨ヨ益一ニ哉
三身畧尺
法身ハ離レ、妄ヲ真理
報身ハ叶フレ理ニ妙智　戒學院印
應身ハ随類應同ノ色質
三身之畧尺取要可有之

」③裏表紙見返し

」③裏表紙

④御舎利惣別二德

御舎利惣別二德

」④表表紙外題

遺身舎利ニ可レ在二惣別之
功德一　惣功德者法報
應ノ三身也
一切ノ法、平等實性ノ大功德ノ
所依此ヲ名ケ二法身一ト
三無數劫修スルヲ二集福恵ノ
資粮ヲ名ケ報身一ト
稱テ二彼ノ機宜一ニ現通説法シ玉フ
名ク化身一ト
次別御功德者
正ク遺身舎利者
常在霊山之尺迦大師
五智所成之不壊化身
大慈大悲至極甚深ノ御形チ
一代利物　最極究竟ノ
御兒スカタ也　雖モ三心法ニ無シ形
如來大悲ノ心ヲ白玉之形ニ顕シ之ヲ
心想ニ雖モ無シ色一ロ尺尊之善
巧智ヲ珂雪之色ニ示シ玉ヘリ之ヲ
是以三僧祇耶百千ノ
苦行モ三千ノ大地、捨身ノ福德モ
皆ナ悉ク収マリ二舎利之一粒一ニ
分チ与ヘ無福之衆生ニ御座ス
我等得ニ之ヲ掌ノ中ニ而
日々ニ拜二見シ尊躰ヲ一載イテ之ヲ

」④表表紙見返し

」④1丁オ

」④1丁ウ

」④2丁オ

」④2丁ウ

頂上ニ而時々ニ恭敬シ奉ル
非ニ多生曠劫之
宿福ニ者ハ争カ
致サン一日片時之結縁ヲ乎ヤ
滅罪生善有リ憑ミ
濟度利生無シ疑ヒ
如來舍利　一興供養
千反生天　後證涅槃ト説ケリ
サレハ一香一花ノ嶽供ニ
千反生天之快樂速ニ感得シ
一心恭敬ノ瞻礼ニ
後證炎ノ大果ヲ早ハヤク
究竟センコト遺身舍利
利生ノ功德我等値遇
難思ノ感應ナル者ノ哉
御舍利惣別二種之御
功德是ニ御座スヘシ

」④3丁オ

」④3丁ウ

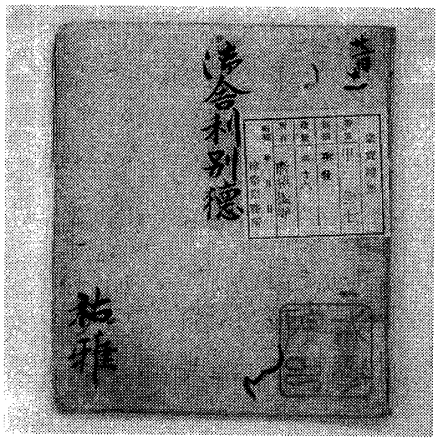
」④4丁オ

」④4丁ウ

」④裏表紙見返し

」④裏表紙

⑤御舍利別二德



御舍利別德

舍利惣別二德
惣德ハ三身也
法身ハ本淨ニシテ更ニ無シ因果ノ差別
本來家静ニシテ無生無滅之躰也
報身ハ備ヘ四智四品ヲ具ス五分法身ヲ
諸根相好恙ク遍シ法界ニ自他ノ身土
互ニ不ス障碍
化身ハ答テ往昔之悲願ニ現随類之
色身ヲ八相成道ヲ十方ノ利ス生ヲ、
御舍利別御功德者
（白丁）
［御舍利］惣德者三身如レ常
［別ノ御功德者］寶恙タラニ經ニ曰ク
於テ閻浮提ニ若シ有テ善男子

」⑤表表紙外題

」⑤表表紙見返し

」⑤内題

」⑤1丁ウ

」⑤2丁オ

」⑤2丁ウ

善女人ニ得テ佛設利乃至
一粒分散ノ一分ヲ
信受シ々持セハ　當ニ知ル是ノ人ハ
是レ佛設利　真ニ是レ佛子ナリ
即是レ法身ナリ尺迦牟尼如來
常住之躰ナリ是人ヲ即名ケ
大ヒルサナトニ亦ハ名ク救世大
アサリトニ持シ佛舎利ヲ
誦ル此ノ言ヲ者ノハ即チ
得ニ如レ是ノ名号ヲ
即名ク大智恵
善巧サタトニ也
（白丁）

⑥舎利惣別二德

」⑤3丁オ
」⑤3丁ウ
」⑤4丁オ
」⑤4丁ウ
」⑤裏表紙見返し
」⑤裏表紙

舎利惣別二德

躰ニ御本尊ニ惣別二種ノ御功德
可御座ス、惣德者三身ナリ
法身ト者青黄赤白之
色ニモ非ス長短方圓之
非レス形ニモ情非情恙ク自性
常住之妙理ヲ具ス是ヲ
名ニ法身ノ如來ト
次報身ト者修因感果之
尊要因縁果滿ノ形躰ナリ
次ニ自受用身者闕ク化他ノ功德ヲ
自受法樂之得ニ德益ヲ
他受用身ハ十地等ノ
等覺ノ薩埵ニ對シテ現シテ舎那
身ヲ説法授記シ玉フヲ
他受用身ノ尊躰トス
次ニ化身ノ佛ハ凡夫二乗ノ
タメニ濟度利益シ御座ス本尊
惣ノ殊御功德是ニ可レ有
次ニ御舎利別ノ御功德者

」⑥表表紙外題
」⑥表表紙見返し
」⑥1丁オ
」⑥1丁ウ
」⑥2丁オ
」⑥2丁ウ
」⑥裏表紙見返し
」⑥裏表紙

⑦三身尺并舎利別徳

三身尺并舎利別徳　」⑦表表紙外題

惣功徳ハ三身也　」⑦表表紙見返し

以テ周遍法界理ヲ名法身ト

以ニ突修突證之智ヲ名報身ト

以ニ随類應同之身ヲ名化身ト

三身之畧尺可有之

次御舎利別ノ御功徳者

最勝王經ニ云ク諸ノ衆生舎

利於奉ル供養シ者モノ生々世々ニ

遠ニ離シ八難ヲ値ニ遇シ諸佛ニ

令ムトニ出ニ離セ生死ヲ説ケリ　」⑦1丁オ

是以

一稱一礼之功

併ラ成リニ諸佛値遇之良因ト

一花一香之供　」⑦1丁ウ

専ラ殖ウヱルニ出離生死之善本ヲ

誰カ遇ニ奉舎利ニ者モノ

不シテ殖ヘ小因ヲ失セン大果ヲ

何ンソ拝シ奉ル駄都ヲ者モノ　」⑦2丁オ

不シテ離生死ヲ沈マンヤ苦海ニ

誠是見テ奉コトモ諸佛ヲ依リ供養ノ功徳ニ

抑夫

證センコトニ涅槃ヲ答ヘシ恭敬ノ精誠ニ

尤モ可ニ帰依ー何ンソ不ランニ竭仰ー

然則　」⑦2丁ウ

信心敬礼之掌ニハ

當來作佛之種ヲ殖ヘ

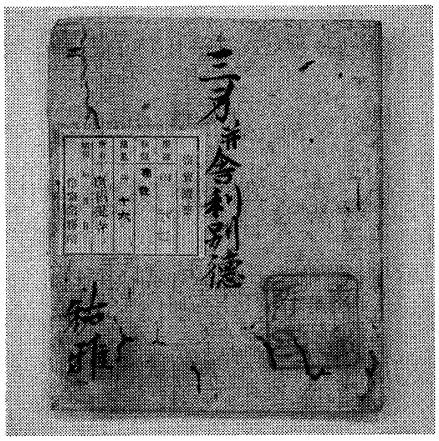
結縁頂載之首ニハ

成等正覚之菓ヲ結ハンコト

併ラ可レ依ニ舎利供養之功徳ニ哉　」⑦裏表紙見返し

御舎利惣別二種之御功徳可有之　」⑦裏表紙

⑧三身并舎利別徳



三身并舎利別徳　」⑧表表紙外題

惣徳者三身ナリ法身ト者周遍　」⑧表表紙見返し

法界之妙理融通無碍之

功徳ナリ是ヲ名二法身ノ如来一ト

次ニ報身ノ如來者唯佛

与佛之内證、境智冥合

中身也　次ニ應身者　」⑧1丁オ

平等法界之慈悲随類

應同之色身也本尊三

身之畧尺是ニ御座スヘシ

別ノ御功徳者

涅槃經云　」⑧1丁ウ

滅後ニ供二養スル舎利ヲ一人ト

供二養スル在世ノ生身ヲ一人ト、

二人所得ノ福聚菩提等ニシテ

無レ異ルコト

善見論云　」⑧2丁オ

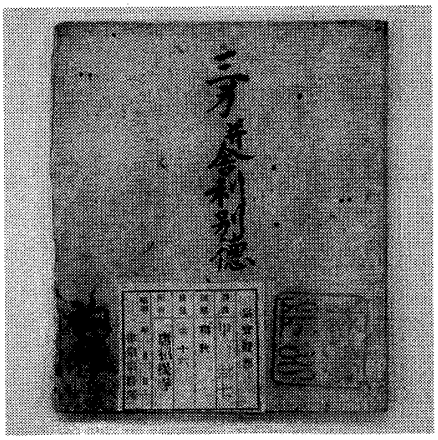
尺迦ノ舎利、到二テ獅子国一ニ

現レシ身ヲ光明赫奕トシテ　」⑧2丁ウ

如シト二在世ノ一也　」⑧裏表紙見返し

」⑧裏表紙

⑨三身并舎利別徳



三身并舎利別徳　」⑨表表紙外題

付二テ本尊ニ惣別二種ノ御功徳　」⑨表表紙見返し

可御座、惣徳ハ法報應ノ三身

ナリ初ニ法身者始覚本覚

無シ替ルコト在纏出纏不レス改ラ

周遍法界之妙理融

通無碍之功徳ナリ性相常　」⑨1丁オ

然之佛ケ、不反真如之一理也、
一色一香、色聲香味、無非中
道ト云ヘリ春ノ櫻梅、秋ノ紅葉、無シ
レ非ストニ云コトニ法性真如之妙理ニ草木
国土悉皆成佛ト説ケハ嶺ノ松カ
枝、谷ノ桂常住本覺之如來ト
被レ得、無色無形ニシテ無シ色ロ、非
因非果ニシテ無シ體、但シ不レ晴ニ雲モ
月ニ在リ明闇ニ随テ風ニ波ミ動搏
有ルカ如シ衆生ハ由テ一念妄心ニ
永ク迷ヒ本覚之一理ニ如來ハ
盡シテ三道之迷惑ヲ顕ス理性
之三身ヲ是ヲ名ク法身ノ如來ト
次ニ報身ノ如來者果ニ断
得之佛ケ境智冥合之
身也空源盡性之妙智
唯佛与佛之内證、戒定
恵鮮之智見ヨリ生シ
三昧六道之道品ヨリ出タリ
因位之万行ニ酬備ヘリ果
位之万德ヲ相好モ無
邊色像モ無邊也四依
払經之大士モ依テ此身ニ
進ム菩提ヲ六道四生之
群類モ依テ此ノ身ニ期ス出離ヲ
離苦得樂之身光明也

」⑨1丁ウ

」⑨2丁オ

」⑨2丁ウ

」⑨3丁オ

」⑨3丁ウ

是ヲ名ニ報身ノ如來ト
次ニ應身ノ如來者平等
法界慈悲随類應
同之色身也、依テ曠劫ノ修行ニ
具ス四八之妙相ヲ酬ヒ多生ノ宿
善ニ居セリ十号之尊位ニ白
毫之光リ照シ法界ヲ常
在霊山ノ之月キ明ニ影ヲ浮ヘ下
機縁之水上ニ和光應用之
躰、鮮アサニシテ無シ時トシテ不レ至ルラ處ロ也
凡三身之略尺是ニ御座ヘシ
次ニ別ノ御功德者
最勝王經ノ中ニ
佛非血肉身　云何有舍利
方便留身骨　爲益諸衆生
ト説ケリ本尊惣別二種御功德是御座ヘシ

」⑨4丁オ

」⑨4丁ウ

」⑨裏表紙見返し

」⑨裏表紙

⑩廻向秋念佛

廻向秋念佛　」⑩表表紙外題

以テハ讃嘆所生之恵業ヲ　」⑩表表紙見返し

奉レ備ヘ天衆地祇之法楽ニ

夫

上影向ノ龍王ハ嘗テ可果之法味ヲ

増シ神通ノ之勢力ヲ　」⑩1丁オ

證明ノ天人ハ聞テ實相之開演ヲ

免レン退没之憂悩ヲ

春日五所之和光［洞（トウタツト）達（トヲク／カヽヤキ）遠曜］［虫虫／ヒラク］

慈悲万行之威德［經釋（タチヌチナラン）］

弥ヨ増（サン）

殊ニハ一結諸（講）衆等　」⑩1丁ウ

晝夜六時ノ稱名者

今ノ勤行也既ニ殖ツ

百千万劫菩提ノ種ヲ

内外両院之往詣者

當來ノ作佛之望也必ス生（セン）ニ

四十九重テ尼之臺ニ　」⑩2丁オ

凡

入來聽聞之貴賤

當上當下ノ諸人

身ニハ除キ盗疾飢之怖畏ヲ

国ニハ拂（ハン）ニ水火風之災難ヲ　」⑩2丁ウ

重乞

上伽藍常住ニシテ而

鷲（エンノ）瓦ラ重ニ子万歳之霜ヲ

達テ久ク轉シテ而

鳳（アウノ）覆カ到ラン二會之暁ニ　」⑩裏表紙見返し

乃至　沙界恒沙界

念佛ノ聲韻遠ク響キ

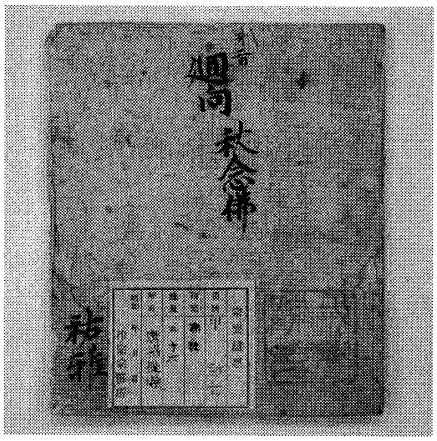
鐵圍大鐵圍

平等ノ廻向普ク及サン

補闕分丁尺迦丁供養淨真言丁

廻向無上大菩提　丁　」⑩裏表紙

⑪廻向秋念佛



廻向秋念佛

以テ讃嘆稱揚之功德ヲ一
奉レ備ヘ二春日五所之法樂一ニ
輪蓋龍王、倍増威光
伏乞
一決講衆、三千之學徒、
壽命官録ハ神ノ所レ與アタフル
萬歳ノ榮花任セ二御情一ニ
斷悪證理ハ佛ノ所レ勸メ玉フ、
僧祇ノ修行勿ラン二間斷スルコト一
殊ニハ
上伽藍ノ柱石不シテレ傾カ、
与ト二天地一共ニ無レク窮リ、
尺羅ノ法水遠ク灌テ
与ト二滄海一同ク無ラン窮リ、

」⑪表表紙外題
」⑪表表紙見返し
」⑪1丁オ
」⑪1丁ウ

年ニ不レス聞ニ早ヤ勝ノ之患ヲ
国ニ永ク拂ハン二刀兵ノ之災ヲ一
一乘ノ梵風速ニ破シ二六趣之
迷闇ヲ一
妙法ノ白花開ニ敷セン三有之
淤泥ニ一
仰承乞
平等大會、一乘妙典
伏乞
經中所説、一切三寶
佛力法力合レ力善願ヲ令シメ
成就セ玉ヘ
補闕分釈迦牟尼宝号丁
供養淨真言丁廻向無上大菩提丁

」⑪2丁オ
」⑪2丁ウ
」⑪裏表紙見返し
」⑪裏表紙

⑫廻向秋念佛

廻向秋念佛

」⑫表表紙外題

捧二讃嘆所生之恵業一者
先ッ増二影向ノ天衆、降臨地
祇之法樂一
次ニハ成二本願上人、群参淨
侶之善願一

」⑫表表紙見返し

夫レ　上所レ獻スル者ハ一乘一實之
醍醐、快（コヽロヨク）飡二受シ此ノ法味一ヲ

」⑫1丁オ

所祈ル者ハ二諦絽隆ノ之
願望、速ニ成二就セン彼ノ所求一ヲ
依レ之

」⑫1丁ウ

念佛ノ之勤行、緞ヒ雖モ磨（ヒスラクト）レ二
劫石一ハ無ク退轉、
講衆ノ之〇（逆）善緞ヒ雖モ重ヌト二
星霜一ヲ不ラン癈退セ一
觀夫

」⑫2丁オ

苟フ二暮（ク）秋之園一ニ者ハ
仙菊ノ之蕚サ也折テ而
送リ二余香一ヲ於佛前一ニ
伴（ソク）フ二夕陽ノ之光一リニ者ハ
蘭燈ノ之影ケ也挑（カヽケテ）而
朗（マ）ニス二照耀一ヲ於殿中一ニ
景節既ニ助ク二道儀一ヲ矣
感應蓋（ソンソ）ランレ成セ二所願一ヲ也
依レ之

」⑫2丁ウ

上監殿ノ甍ラカ不スシテ傾カ兮
待チ二籠葫之曉一ヲ
花原ノ聲ヘ無クシテ絶ルコトレ兮
到ラン二鷄足ノ之夕一ヘニ
參勤諸山ノ之淨侶
群集諸寺之僧衆

」⑫3丁オ

早ク成シ二一心ノ之所願一ヲ
速ニ滿タン二一世ノ之願望一ヲ
聽聞貴賤　結緣男女
滅罪生善　所願円滿
乃至

」⑫3丁ウ

上有頂ノ之雲ノ上ヘ
法音響ヒテ兮醒（スマシ）二沈醉之眠一リヲ
無間ノ之焔ヲノ底ニ
法水麗イテ兮止メ二受苦之患一ヘヲ
仰承乞如來出世ノ本壞、
一乘妙典

」⑫4丁オ

伏シテ而願ハ尺尊善巧ノ利生、
碎（サイ）身舍利
佛法合レ力　成二就シメ玉ヘ所願一
補闕分等

」⑫4丁ウ

」⑫裏表紙見返し

」⑫裏表紙

⑬廻向秋念佛

」⑬表表紙外題

廻向秋念佛

」⑬表表紙見返し

捧二講經讃嘆一〇所生之恵
業ヲ者
奉二レ餝カサリ天衆地祇、内證外
用ノ之威光ヲ一
殊ニハ祈ル二一結構衆参勤
諸德之所願ヲ一　夫
上天衆者飡二受シテ法味ヲ一消シ二五
衰之露ユヲ一於歡喜園ニ一
地祇者證二明シテ作善ヲ一止メン三熱ノ
之苦シミヲ一於秋津州ニ一　依レ之
一天泰平　諸国靜謐
五穀豊饒　万民快樂
殊ニハ
伽藍基堅モトヒシテ

」⑬1丁オ

」⑬1丁ウ

鳳ノ甍ヲ遥ルカニ期シ二龍花之春ヲ一
僧侶継ツイテクヒスレ踵
法莚久ク待タン二鶏足之秋ヲ一
一結講衆　善願円満
生前之逆善既ニ成就ス
没モツ後ノ之勝利盍ナンソ萠得哉
凡ソ上有頂之雲ノ上ヘ
醒シ二非想ヒ味セイレツ劣之眠リヲ一
無間ノ之煙リノ下シタ
息ン二八熱熾然之苦ヲ一
功德無レ限リ利益普ク及サン
仰承乞末世福田三千駄都
伏シテ而願　當來得度
一乗妙典
佛法合力　所願成就玉ヘ

」⑬2丁オ

」⑬2丁ウ

」⑬裏表紙見返し

」⑬裏表紙

⑭廻向秋念佛

廻向秋念佛

」⑭表表紙外題

捧テ讃嘆所生ノ之恵業一者
影向天衆、降臨地祇
春日五所大明神等
倍増法樂　倍増威光
聖朝安穏　寺社泰平
殊ニハ
一結講衆　参勤ノ淨侶
上三笠ノ朝日光リ暖ニシテ矣
久ク開キ現世安穏ノ之榮花ヲ
五所ノ榊木葉露ン繁シテ兮
遥ニ萌キ當得作佛之覺芽ヲ
亦願クハ當寺他寺ノ諸德等
油鉢不レシテ傾兮
遥ニ挑ケ恵燈於星宿之夕ニ
戒珠無レシテ雲リ兮
遠ク添ヘン瓔珞於解脱之朝ニ
乃至
聽聞來集之男女
念佛結緣之諸人
二世ノ所願二ツ共ニ成シ
一心ノ所求一モ無ラン闕キ、
惣而テハ
上三千大千ハ尺尊ノ化土也
皆ナ預リ法王ノ之慈育ニ

」⑭表表紙見返し

」⑭1丁オ

」⑭1丁ウ

」⑭1丁オ

」⑭1丁ウ

五道六道ハ衆生ノ迷津也
速ニ蒙ン船師ノ之済度ヲ
仰承乞　舍利尊像
伏シテ而願クハ　法花一乘
佛法合力　所願成弁シメ玉ヘ
補闕分等

」⑭裏表紙

⑮廻向秋念仏

廻向秋念佛

」⑮表表紙外題

捧テ讃嘆所生之恵業一者
天衆地類　倍増法樂
春日五所　倍増威光
殊ニハ
一結講衆　逆善成就
諸寺諸山　善願円満
夫

」⑮表表紙見返し

」⑮1丁オ

上究竟内證之霊宮ニハ
旅ヨ増シ法味甚深之納受ヲ一
和光利物之瑞籠ニハ
倍ス播ト、サン擁護廣大之勝德ヲ一
依之　一天泰平　四海静謐
然ニ　舎利者現世福田之尊躰ナリ
竭仰之人ハ身心無レ恙ツヽカ
法花者後生善處之要術ナリ
信敬ノ之族ヤカラハ恙地有リレ焉ミ
依之
上常在霊鷲山
僧侶之止住ハ均シ佛德ニ一
我浄土不毀
伽藍長久ヲ憐ナラン聖境ニ一
惣テ三界流浪之衆生
混シ久遠壽量之大海ニ一
二障飲毒ノ諸子
■■服ニ擣篋和合之良藥ヲ一
仰承乞神變難思遺
身舎利
伏シテ而願ハ本迹甚深一乘
經王
佛法合力　所願成就給へ

」⑮1丁ウ

」⑮2丁オ

」⑮2丁ウ

」⑮裏表紙見返し

」⑮裏表紙

⑯廻向秋念佛

廻向秋念佛
捧テハ開講演説之功德ヲ一
奉レ賁リ影向神祇ノ之威光ヲ一
夫レ
當寺恒例之念佛逆善ハ
開ヒラキ梵莚於一乘一實ノ朝ノ露ニ一
為シテ毎年不闕之作善ト一
任ス巨益於
十如實相之夕ノ嵐シニ一
因レ茲
上伽藍繁昌シテ興ニ隆シ佛法ヲ一
顯密修學ノ之勤メ無シテ怠リ
済生利物ノ之願弥ヨ新ナラン
結縁ノ之貴賤
自リ東西ニ運ハコヒアユミヲレ歩

」⑯表表紙外題

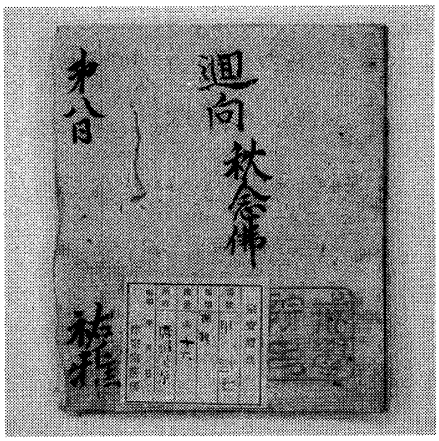
」⑯表表紙見返し

」⑯1丁オ

」⑯1丁ウ

聽聞ノ之諸輩
自リ南北ニ継ツク踵スヲ
面々ニ裏ニ無價ノ之宝珠ヲ
各々ニ翫フ菩提之覺月ヲ者哉
觀夫
紫菊殘レテ籠マカヒニ、戴イタヽク霜雪ヲ
」⑯2丁ウ
自ラ表シ法事不退之粧ヲ
紅葉散シテ庭ニ、曝サラスキンシウヲ錦繡
豈ニ異コトナラン衆僧坐列之茵シトネニ哉
以テ景節之自然ヲ
知ルル感應ノ之難ナルコトヲ思ヒ
」⑯3丁オ
重乞
一結講衆等
上現ニハ嘗メテ病除良藥之味ヲ
保チ壽福ヲ百年ハクニ
當ニハ詣シテ即往安樂之臺ニ
」⑯3丁ウ
遂トケ御座サン隱ニ二世安樂之求願ヲ
乃至
上ミ有頂　下モ無間
同ク遊ハン本覺之真成ニ
補闕分之　供養之
廻向之
」⑯裏表紙見返し
」⑯裏表紙

⑰廻向秋念佛



」⑰表表紙外題
廻向秋念佛
」⑰表表紙見返し
捧テハ讃嘆稱揚之恵業ヲ
［天衆地類　倍増法楽］
春日五所　倍増法楽
［春日五所　倍増威光］
輪蓋龍王　倍増威光
殊ニハ
」⑰1丁オ
一結講衆　逆善成就
別而ハ
伽藍繁昌　法莚不退
現前ノ諸德　二世悉地
成就圓滿
結緣諸人
」⑰1丁ウ
現世安穩　後生善處
乃至法界平等利益

補闕分　尺迦牟尼宝号
供養浄真言
廻向無上大菩提

」⑰裏表紙見返し
」⑰裏表紙

⑱弥陀如来惣別三身事

弥陀如来惣別三身事
夫佛有三身、
先法身者
万徳円満ノ之理性矣
疑然常住ノ之真躰也
貫轍シテ生佛ヲ、而三世ニ不
變、誡羅シテ迷悟ヲ、而四
相無遷ルコト、
次報身者
四智究竟ノ之覺躰矣
周遍法界ノ之妙相ナリ也

」⑱表表紙外題
」⑱表表紙見返し
」⑱1丁オ

即答テ因位ノ之万得ニ、感得ス
福智ノ二歳ヲ、故尺セリ諸根
相好一々無邊無限善根
所引生煩ト、其躰唯佛
与佛ノ之境界ニシテ尚非本
覺薩埵ノ之所知ニ也
次應身者
八相成道ノ之権跡矣
四八端嚴ノ之金容也
隨類應同ノ之色質矣
和光利物ノ之尊躰也
然ルニ三身一異ナルコト猶如不
水波ノ之相離万物不二ニシテ二
宛似タリ金象ノ之無差別
故ニ妙楽大師尺テ云ク
三身相即無暫離時豈
狐法身遍一切處報應
末嘗離於法身咒法
身處二身常在煩知ノ
三身遍於諸法ト尺セリ
凡ソ衆生ハ迷此理ニ故ニ往
還　六超ノ苦域ニ諸佛ハ了
此躰ヲ、故遊戯四徳ノ之
楽劫ニ　然則法身ノ万徳ヲハ
鎮ヘニ備ヘ凡躰ノ之上ニ無作ノ
三身ハ本有迷識ノ之中ニ

」⑱1丁ウ
」⑱2丁オ
」⑱2丁ウ
」⑱3丁オ
」⑱3丁ウ

故経ニハ説毘盧遮那躰
清浄三界悉皆同中畧
想故沈生死由實知故
詫済又三身功徳如此、
虫旃陀如来別御功徳者
夫旃陀如来ハ者苦ハ珊提
蘭国ノ主号無上念王ト
旨ハ極楽世界ノ尊名
無量壽佛ト名号衆
生ニ勝シ給ヘリ故ニ称念
スレハ無始ノ之罪障ヲ消
滅シ當生ノ快楽ヲ生
長ス誓願余生ニ秀テ給ヘリ
虫中要五逆ヲ不擇、安
養世界ニ導キ給フ
阿ミタト者梵語也梵
語者天竺ノ詞一字
無量ノ義ヲ含ス此ノ佛ヲ
念シ奉ツルニ現當ノ之所
願成就セスト云フ事無シ
　サレハ妙樂大師尺テ云ク
諸教所讃多在弥陀ト
尺シ給ヘリ
五劫ノ思惟各号不思議ノ
功徳余佛、　勝シ超世ノ
願王ト云ハレ御テ勝利

」⑱4丁オ

」⑱4丁ウ

」⑱5丁オ

」⑱5丁ウ

」⑱6丁オ

甚深ナル御事余佛ニ超ヘ
給ヘリ
　然ルニ我等
末造四重五逆ノ之重羅ヲ、
盍念一念旃陀ノ之名号ヲ、
　然ラハ我等
棄テ他力本願ニ、顧ラン弥陀ノ
引接ニ之条更ニ不可有疑

」⑱6丁ウ

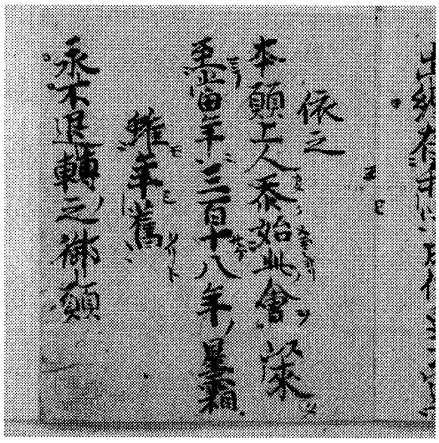
」⑱裏表紙見返し

」⑱裏表紙

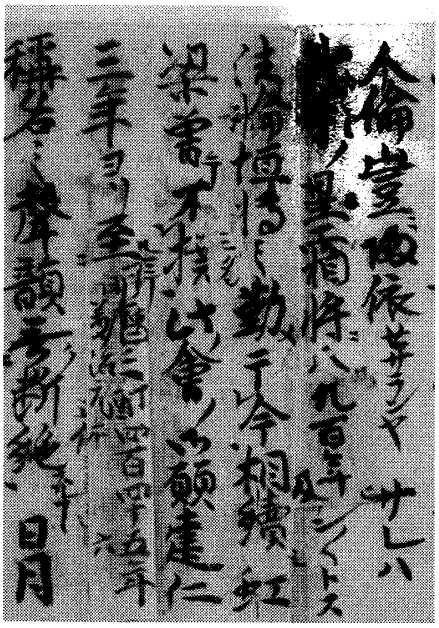
《資料》

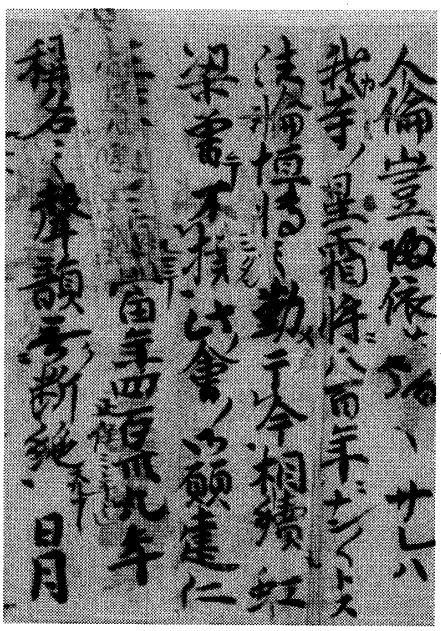
資料1　①『秋念仏会表白』奥書

資料2　①『秋念仏会表白』本文と書き込み

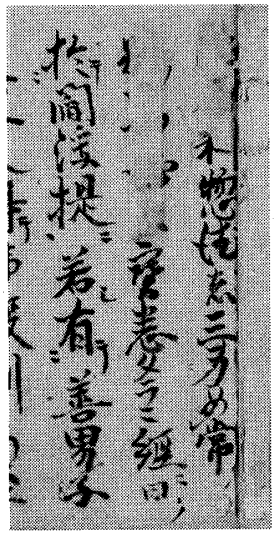


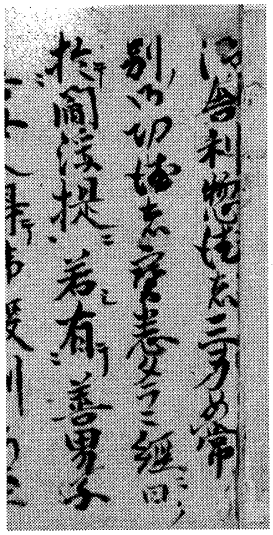
資料3　③『舎利別徳』付箋



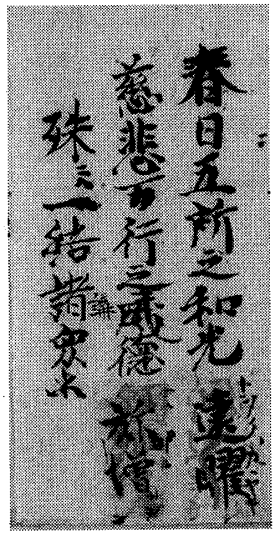


資料4　⑤『御舎利別徳』付箋

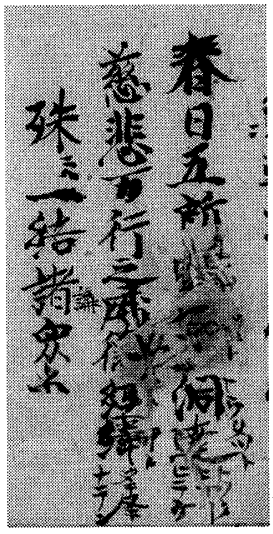


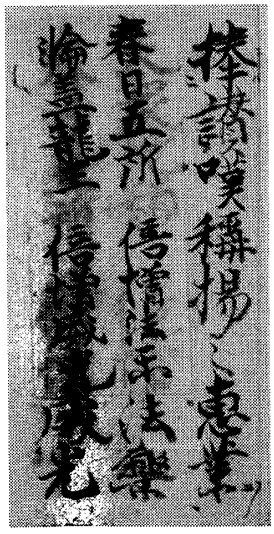


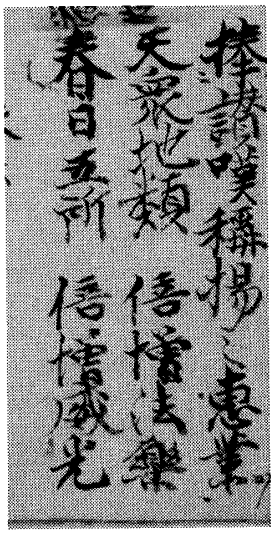
資料5　⑩『廻向秋念仏』付箋



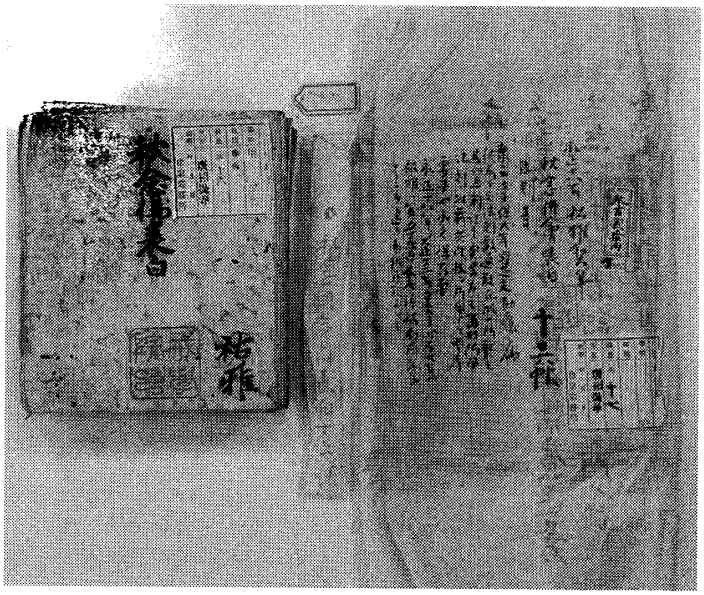
資料6　⑰『廻秋念仏』付箋







資料7　智棄長老表書



（ふじた　えり　昭和女子大学大学院生活機構研究科生活文化研究専攻　院生）

受理年月日　平成16年9月30日
審査終了日　平成16年11月30日